2020年（令和2年）
第152号
（8月1日）

平安月報
The HEIAN monthly report

発　行　所：立正佼成会　京都教会
発行責任者：渉外部長　田中規之
編集委員長：渉外広報　植田恭司
〒605-0041　京都市東山区三条東町 230
TEL (075)762-2211　FAX (075)762-2266

令和２年次　壮年総会　～YouTube により配信～　（記事は一部本部ＨＰより抜粋）

令和２年次「壮年（ダーナ）総会」が６月２８日、大聖堂からのインターネット中継によって開催され、京都教会法座席にも映されました。総会は例年、全国の壮年幹部が一堂に会して行われてきましたが、今年は新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、初めて動画配信での実施となりました。総会には庭野光祥次代会長が出席。壮年部員２人の体験説法、講演、討論会などが行われ、全国の壮年部員らが映像を通して総会に参加しました。今年のテーマは『祈り』。

当日は“壮年総代”の國富敬二理事長が導師をつとめ読経供養が行われた後、名古屋西教会壮年部員（４９）と津教会壮年部員（５８）の体験説法を録画した映像が推薦者のコメントとともに配信されました。

次いで、一般財団法人・日本総合研究所会長の寺島実郎氏が『何を目指す日本再生か？　今を生きる佼成壮年の役割』をテーマに講演しました。

寺島氏は、新型コロナウイルスが世界的に蔓延（まんえん）する現状に触れ、ウイルスや細菌は人類の誕生以前から生存し、生物界に広く存在することなどを説明し、ウイルスを抑制しつつ共生する大切さを強調。その上で、物事を総体的に考える「全体知」の探求が大事であるとし、その姿勢は仏教の思想にも通じると述べました。

また、近年、日本でクローズアップされている経済格差や貧困の問題を解説しながら、元々あった経済や社会の構造的問題が、今回のコロナ禍により雇用面などで顕著に現れたと語りました。

さらに、宗教への関心が低下しているといわれる日本で、仏教者には、自己を深く探求する仏教の原点に立ち返りつつ、同時に、人の救済を目指す大乗仏教的な視点で現代社会の問題に向き合う生き方が求められていると述べました。

続いて、全国から寄せられた「菩薩として温かい触れ合いをする壮年部員のエピソード」が本人の写真とともに紹介されました。

この後、寺島氏を囲み、光祥次代会長、実行委員会議長の江東教会壮年部長（５６）、教育グループスタッフ２人による討論会が行われ、この中で寺島氏は、ＡＩ（人工知能）時代における宗教の意味、デジタル化に対応できない壮年層へのフォロー、宗教間の調和を図るために仏教が果たす役割などについて自身の見解を述べました。

「お題目修行」に続き、最後に“壮年本部長”の光祥次代会長があいさつし、アルベール・カミュの小説『ペスト』の中にある“際限なく続く敗北”という言葉を紹介。「私たちは一人でも多くの人の幸せを求めて努力しながら、“際限なく続く敗北”の中で、時々感じられるささやかな幸せや、人の温かさに触れられる喜びによって歩んでいるのかもしれない」と語りました。

また、菩薩とは矛盾を抱える力を持つ人と説明し、「今の時代に必要なのは、強い人よりも弱さを見つめられる人、矛盾をそのまま包み込める人なのかもしれません。『あの人に話を聞いてもらいたい』と思ってもらえるようになりたい、そして、人と出会うことにいつも真摯で、誠実でありたい―それこそが新たな時代をつくる価値観ではないでしょうか」と述べました。

時事刻々

夏の風物詩にあげられる「甲子園」（高校野球）ですが、今年は新型コロナウイルスの影響で中止になりました。その報を受けて涙する球児の姿の報道が印象的でした▼しかし、関係者の努力もあって、中止になった春季大会は甲子園で一試合できるようになり、選手たちのプレーが甲子園に戻ってきます。夏の大会は甲子園ではできませんが、地方大会が開催され、熱戦が戻ってきました▼過日、阪神タイガースの矢野監督たちが「高校球児のために何かできることはないか」という声をかけ、全国の野球部の３年生全部員を対象に、「甲子園の土」キーホルダーを贈呈することにしました。心温まる話題で、今月中には配られるようです▼仏教では、人に自身の仏性を自覚させる方法に、「順化（じゅんけ）」と「逆化（ぎゃっけ）」があるとされています。コロナ禍でも、取り組めることを考えて、実践することで、普段の生活では気づかなかったことが見えてくるのでしょう。

今月のことば　～むだなものはない～　　亀岡支部壮年部長　平井孝典

８月の佼成を担当させて頂きましたのは、亀岡支部の平井孝典です。宜しくお願いします。

コロナウイルスの感染の収束がなかなか見えてきません。少しずつ活動を再開してきてはいますが、足元の感染者の数はジワジワと増加し、安心して活動をしていくにはもう少し時間を要すると思われますね。

そんななんとなく不安な中、今月の会長先生のご指導は「むだなものはない」です。法華経の如来寿量品の教えを日々の生活を送る中で、どのように生かしていくのかを示して下さいました。

先ずは「仏に帰る」ための精進。如来寿量品においては、私たちはすでに悟っており、悟ったあとの精進をしている。それがいまの私たちの日常生活といえるかもしれません。では、なぜ精進するかといえば、私たちはときどき自分の本質を忘れてしまうので、悟っている「ほんとうの自分」に帰するための精進。それが日常の信仰生活なのです、と教えて頂きました。

更に、自分のことのように、仏の教えはすべて、いつでも心から、幸せだ、うれしい、楽しいといえる人間になるためのものです。私たちは、自分の本質を忘れなければ、その幸せを実感できるのです。と幸せに至る道筋を教えて頂きました。

如来寿量品を生活にどう生かしていくかについての方向は示して頂いたのですが、今月のテーマである「むだなものはない」ということとの関係がもうひとつ分からないと思っていたのですが、次のようにていねいに教えて頂きました。

幸せな自分を私たちはときどき忘れては苦しんでいます。そんな私たちに仏さまはさまざまな形で、あるいはものごとを通して、迷いの世界から離れるヒントを与えて下さっているのです。自分にとっていいことも悪いことも含めたこのあらゆることが「ほんとうの自分」に帰って幸せを味わうためのヒント、縁になるということです。と示して下さいました。

目の前に起こるすべての現象を自分のこととして受け止め、学べばこの世にむだなものごとは何一つなく、その一つ一つが「ほんとうの自分」すなわち仏の縁となるのですと締めくくって頂いたのです。

先日、壮年部のオンライン壮年（ダーナ）総会がありました。寺島先生の講演の中で全体知を持つことの重要性を改めて教えて頂いたのです。今、コロナウイルスの感染で何か分からない不安を持っているのですが、その本質は何かをしっかり見ていない私だったことに気が付きました。会長先生は、ものごとをどのように見ていくのかについて、客観的、多面的、全体的に見るとともに、表面的な現象にとらわれず、奥にある真の相を見ていくのです、とご指導下さっています。現下のコロナウイルスに対し、真の相を見るように努力し、この不安を消していきたいと思います。

また、壮年総会の最後に光祥さまは「ああ、あの人に話を聞いてもらいたい。私もそんな風に思ってもらえるようになりたい。人と出会うことにいつも真摯で誠実でありたいと願っています。それこそが新しい時代の価値観ではないでしょうか」とお言葉を頂きました。

今、コロナウイルスの関係で自由に動けない中、開祖さまの「我汝を軽しめず」をじっくりと拝読させて頂いています。その中で、ほんとうの幸せは、人のために精いっぱい尽くし自分のまわりを明るくしていくことです。毎日の生活で出会う人たちとなごやかな関係を築いていくことですと教えて頂きました。

自由に動くことが出来ないという現象から、コロナ後をどう動けばいいのかを考える時間を与えてもらっています。

コロナウイルスというご縁も「ほんとうの自分」に帰り、幸せを味わうためのヒントだと心から思うことが出来るようにとの仏さまのお慈悲と受け止めさせて頂きました。

日常生活の中の仏教用語　～えっ？こんな言葉も仏教が語源？～

言葉のルーツを知って仏教に親しみを持ちましょう。

【足を洗う（あしをあらう）】

悪事をきっぱりと縁を切ること。悪い仕事をやめて、堅気の仕事につくこと。

釈迦の時代、僧侶たちは裸足で生活していた。托鉢や説教に出かけるときも、裸足のままで外を歩き、寺院に帰ると汚れた足をきれいに洗いきよめ、寺の中へ入った。

この足を洗う習慣を、世間でいわれる、汚れた世界から心身ともにきれいになることにたとえてつかうようになった。

（「仏教早わかり百科～主婦と生活社～」から抜粋）

慰霊の日　～沖縄戦での全戦没者を追悼して～

沖縄全戦没者追悼式が「慰霊の日」である６月23日に行われ、立正佼成会沖縄教会所属の県立首里高３年、髙良朱香音（あかね）さん（17）が平和の詩「あなたがあの時」を朗読されました。

髙良さんは小学校の時に読み聞かせで触れた絵本や平和学習の講話、ガマ(※)での追体験など、これまで沖縄戦に関して見聞きしたことを組み合わせ、「今を生きている自分から戦争体験者に何を伝えられるか」という視点で詩を書いた。それは「戦争を体験して生き延びてくださった方に、感謝を言葉で伝えたいと思った」と作品に思いを込めたものになりました。（一部記事は琉球新報より抜粋）　　(※)洞窟のこと。沖縄地方の方言

髙良さんが朗読された詩の全文を紹介します。「あなたがあの時」

「懐中電灯を消してください」
一つ、また一つ光が消えていく
真っ暗になったその場所は
まだ昼間だというのに
あまりにも暗い
少し湿った空気を感じながら
私はあの時を想像する
あなたがまだ一人で歩けなかったあの時
あなたの兄は人を殺すことを習った
あなたの姉は学校へ行けなくなった
あなたが走れるようになったあの時
あなたが駆け回るはずだった野原は　真っ赤っか
友だちなんて誰もいない
あなたが青春を奪われたあの時
あなたはもうボロボロ　家族もいない
食べ物もない　ただ真っ暗なこの壕の中で
あなたの見た光は、幻となって消えた。
「はい、ではつけていいですよ」
一つ、また一つ光が増えていく
照らされたその場所は
もう真っ暗ではないというのに
あまりにも暗い
体中にじんわりとかく汗を感じながら
私はあの時を想像する
あなたが声を上げて泣かなかったあの時
あなたの母はあなたを殺さずに済んだ
あなたは生き延びた
あなたが少女に白旗を持たせたあの時
彼女は真っ直ぐに旗を掲げた
少女は助かった
ありがとう
あなたがあの時
あの人を助けてくれたおかげで
私は今　ここにいる
あなたがあの時
前を見続けてくれたおかげで
この島は今　ここにある
あなたがあの時
勇気を振り絞って語ってくれたおかげで
私たちは　知った
永遠に解かれることのない戦争の呪いを
決して失われてはいけない平和の尊さを
ありがとう
「頭、気をつけてね」
外の光が私を包む
真っ暗闇のあの中で
あなたが見つめた希望の光
私は消さない　消させない
梅雨晴れの午後の光を感じながら
私は平和な世界を創造する
あなたがあの時
私を見つめたまっすぐな視線
未来に向けた穏やかな横顔を
私は忘れない
平和を求める仲間として

沖縄県には各都道府県出身者の慰霊塔（碑）があり、宜野湾市嘉数ヶ丘（嘉数高台公園内）には2,530数柱の御霊と世界の恒久平和を祈念した「京都の塔」が昭和39年に建立されました。慰霊追悼式は（一社）沖縄京都の塔奉賛会（理事長　植田喜裕前京都府議会議員）が主催し、ご遺族並びに奉賛会会員、地元嘉数区の皆さま他が参列し、桜の満開の下、毎年（今年で57回目）しめやかに斎行されています。

写真は公益財団法人 沖縄県平和祈念財団
http://heiwa-irei-okinawa.jp/01ireitou/26kyoto/26kyoto.html より抜粋

庭野日敬開祖　法話集 ～開祖随感より～

「人生にむだはない」

私たちが人生で体験することには一つのむだもありません。お釈迦さまが「人生は苦である」と教えられているように、私たちの人生には苦がつきものです。けれども私たちは不幸や苦しみに見舞われると、「なぜ自分だけがこんなに苦しい目に遭わなくてはならないのか」と恨（うら）みごとを言い、嘆くのが常です。

しかし、その苦しみを通らないと人生の本当の喜びは得られないのです。いや、苦しみを乗り越える、そのことの中に真の楽があるといってもいいのです。人は自分が実際に経営に失敗して苦しみ、病気で苦しんでみてこそ、同じ苦しみを持つ人に、それを乗り越える道、そして乗り越えたときの喜びを、自信をもって説くことができます。

苦しみにぶつかったときに、「仏さまが、この苦しみを通して同じ苦しみにある人たちを救う力を与えてくださるのだ」と受け止められるようになると、力が内からわき上がってきます。その力が道を開いていくのです。「無用の用こそ大切」といいます。人生でぶつかるさまざまな苦しみ、むだな回り道と思えることも、すべて将来に生きていくのです。

「ピンチに内を固める」

「この不況はいつまで続くのか。早く手を打ってほしい」という声が高くなっていますが、ここで腰をすえて「いまこそチャンス。いまだからこそできることを」と考えてみてはどうでしょうか。

昭和の初めの大恐慌で松下電器がピンチに陥ったとき、社長の松下幸之助さんは、「どんなに在庫を抱えようと、社員の首は切れない。工場の従業員には給料を払って半日休んでもらい、店員全員で在庫を売り歩こう」と呼びかけて、危機を乗りきったそうです。そうして全社員が一丸となって難関を乗り越えたことで、考えられないような力が生まれ、それが松下電器の発展の原動力になった、と話しておられます。好景気で会社の業績が順調に伸びているときには、全社員が心を一つにするということが、できそうでいてなかなかできないものです。

ピンチの時こそ、内を固める時です。じっくりと人育てに取り組み、互いに協力し合うことで社員同士の信頼感を培っていく。ただ手をこまねいて待っているだけでは、また次のピンチにさらされてしまいます。不況の時こそチャンス。バブルでゆるんだ体質のままでは発展は望めません。

「物があり余る怖さ」

「比叡山の歴史をみると、貧乏のときほど修行がさかんだったようです」と、山田恵諦座主からうかがったことがありました。「衣食足りて礼節を知る」という言葉があって、豊かな時代になって生活にゆとりができれば、人は自然に内面を磨き、礼節を知るようになるように思えますが、必ずしも、そうとはいえません。逆に、外側の物質的な楽しみばかりを追いかけがちな一面をも持っているのです。むしろ貧しい時代、危機の時代のほうが、内面を真剣に見つめるようになることが多いのです。

この世に、むだなことは一つもないといいます。これまであり余っていたお米が急に足りなくなってきた、と報道されていますが、それも、お米のありがたさを教えるため、と受け止めなくてはならないのではないでしょうか。あり余っていると物のありがたさを忘れてしまうのです。いまや日本の国ほど物を粗末にする国はないとさえいわれます。

私たちが食膳に「いただきます」と合掌するのは、さまざまなものの命を頂戴して、自分の命を養わせていただく感謝の言葉です。そうして生かされている命を、どう使わなければならないかをかみしめる機会を、むだにしてはなりません。　（つづく）

８～９月の主な教会行事

８月・９月　新型コロナウイルス感染拡大防止のため、すべての行事は中止しています。

●行動自粛が解除され、新しい生活様式が求められる中、ご著書をじっくり読ませて頂く時間に出来るかもしれません。本部のホームページから、会長先生の毎月のご法話など、拝読できます。
http://www.kosei-kai.or.jp/　をパソコンやスマホでご覧下さい。

●【開催のご案内】京都佛立ミュージアムにおいて、「トランクの中の日本。戦争、平和、そして仏教」が開催されています。入場無料。期間７月11日(土)～11月25日(水)

●メッセージ

今年の祇園祭はコロナ対策として山鉾巡行が中止されましたが、17 日に山鉾保存会代表者やボランティア役員が四条通烏丸交差点から八坂神社四条御旅所まで徒歩で巡行しました。私も役員の一人として「チリン棒」の担当で参加させて頂きました。祇園祭千百余年の歴史の中で、巡行中止はたびたびあったようです。特に応仁の乱では 33 年もの間、中止になっていたとか…。しかし、当時の京都の町衆がその後、絶やすことなく継続されたおかげで今日があります。まさに「継続は力なり」。今年、巡行は出来ないものの、その中で出来ることを見い出されたことに脱帽です。私たちも代々伝えることをあきらめてはいけません。